



東南アジア

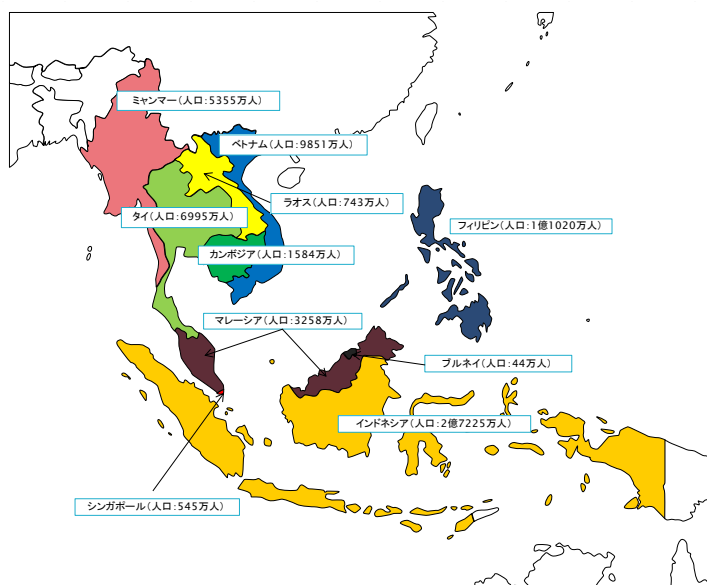
1 農・畜産業の概況

アジア開発銀行によると、ASEAN（東南アジア諸国連合）加盟10カ国（図1）のうち、シンガポールとブルネイは、GDPに占める農業の割合が極めて低く、経済成長の著しいマレーシア、タイ、フィリピン、インドネシア、ベトナムの5カ国（以下「5カ国」という）は、8～14%（2021年）となっている（表1）。これら5カ国のうち、マレーシアおよびタイを除く3カ国ではその割合が低下している。都市と農村の経済格差が顕著になっている中で、農村は失業者の緩衝機能を果たしているといわれている。また、コメなどの主要作物の価格が政策的に低く抑えられているため、農業分野の産出額が増加しないという特徴も有している。残り3カ国を見ると、ラオスが18.1%（21年、前年比0.4ポイント減）、ミャンマーが20.9%（20年、同0.5ポイント減）、カンボジアが24.3%（20年、同0.1ポイント増）となっている。これらの3カ国は、政情不安が長引いたことなどから農業以外の産業の発展が遅

れており、相対的に農業の比重が高かった。近年は政情安定化に伴う経済発展により、その割合は低下傾向にあったが、特にミャンマーでは政情不安が再燃し、GDP成長率が大きくマイナスに振れるなどの経緯もあり見通しは困難となっている。また、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により経済活動が低迷し、海外渡航が制限されたため、観光業の盛んな国や地域での経済に対する影響は大きく、20年は多くの地域でGDP成長率はマイナスとなった。21年はブルネイを除き再びプラスに転じた。

国別の特徴として、マレーシアは、油ヤシ、天然ゴムなど永年性作物の栽培が盛んな一方、フィリピンは、トウモロコシ、コメなどの穀物が中心となっている。畜産業については、食習慣、宗教、農業の形態などを反映して、国ごとに畜種の重要度が異なるため、品目ごとの生産量には大きな差がある。

図1 ASEAN加盟国



資料：国際通貨基金（IMF）「World Economic Outlook Database」
注：数値は2021年。

表1 GDPに占める農業の割合

国	(単位：%)		
	2020年	21年	差
シンガポール	0.0	0.0	0.0
ブルネイ	1.2	1.2	0.0
マレーシア	8.3	9.7	1.4
タイ	8.7	8.7	0.0
フィリピン	10.2	10.1	▲0.1
インドネシア	14.2	13.8	▲0.4
ベトナム	12.7	12.6	▲0.1
ラオス	18.5	18.1	▲0.4
ミャンマー(注)	21.4	20.9	▲0.5
カンボジア	24.2	24.3	0.1

資料：アジア開発銀行
注：ミャンマーは2019年および2020年の数値、タイは暫定値。

ASEAN各国の主要穀物および畜産物の生産量を見ると、いずれも主食となるコメが多くなっている。また、一人当たりの年間消費量もふまえると、主要な畜産物は豚肉および鶏肉であるが、宗教上の理由から豚肉を消費

しないイスラム教徒の人口が多いインドネシアやマレーシアなどでは鶏肉が多く、宗教上の制約が比較的少ないベトナムやフィリピンでは豚肉が多い（表2、3）。

表2 ASEANの主要穀物および畜産物の生産量（シンガポール、ブルネイを除く）

(単位:千トン)

国	年	コメ	トウモロコシ	牛肉	豚肉	鶏肉	鳥卵	生乳
マレーシア	2017	2,571	73	46	218	1,598	845	45
	18	2,639	69	47	224	1,588	805	46
	19	2,353	60	44	223	1,589	654	48
	20	2,356	68	41	221	1,629	774	47
	21	2,418	75	41	219	1,559	813	49
タイ	2017	32,899	5,171	176	928	1,659	695	1,200
	18	32,348	5,419	164	933	1,681	710	1,200
	19	28,618	4,892	165	925	1,714	703	1,200
	20	30,231	5,179	134	926	1,748	713	1,200
	21	33,582	5,677	155	928	1,784	722	1,200
フィリピン	2017	19,276	7,915	238	1,675	1,287	492	23
	18	19,066	7,772	203	1,624	1,414	534	15
	19	18,815	7,979	201	1,608	1,484	583	15
	20	19,295	8,119	175	1,500	1,394	606	17
	21	19,960	8,300	183	1,187	1,343	661	16
インドネシア	2017	55,252	29,614	516	317	3,176	4,633	1,545
	18	59,201	31,023	523	216	3,838	4,688	1,549
	19	54,604	20,262	530	236	3,929	4,753	1,560
	20	54,649	25,323	472	281	3,642	5,142	1,565
	21	54,415	20,664	459	324	3,844	5,156	1,593
ベトナム	2017	42,764	5,110	265	2,741	786	310	909
	18	44,046	4,874	276	2,811	840	349	964
	19	43,495	4,732	290	2,430	990	410	1,013
	20	42,765	4,558	302	2,467	1,146	474	1,076
	21	43,853	4,446	348	2,590	1,520	411	1,097
ラオス	2017	4,040	1,193	54	87	28	15	7
	18	3,585	982	56	86	30	16	7
	19	3,535	794	58	93	34	17	7
	20	3,519	684	60	97	36	18	7
	21	3,870	1,050	61	102	38	17	7
ミャンマー	2017	26,546	1,909	446	907	1,581	555	2,546
	18	27,574	1,984	129	257	485	76	2,405
	19	26,270	1,986	132	271	553	95	2,001
	20	25,983	2,072	135	285	623	112	2,050
	21	24,910	2,300	137	285	620	111	2,152
カンボジア	2017	10,518	750	65	112	17	20	24
	18	10,892	1,232	62	110	18	19	24
	19	10,886	895	61	105	18	19	24
	20	11,248	900	60	106	18	19	24
	21	11,410	920	60	107	17	19	24

資料：国際連合食糧農業機関（FAO）「FAOSTAT」

注1：牛肉は水牛肉を、鳥卵は鶏卵および鶏卵以外の鳥の卵を、生乳は水牛、めん羊・ヤギの乳を含む。

注2：トウモロコシは青刈トウモロコシを含む。

注3：過去にさかのぼって数値が変更される場合がある。

注4：黄色部は各品目における2021年の最大生産量の国を示す。

表3 5カ国の畜産物の1人当たりの年間消費量

(単位: kg/人/年)

国	牛肉	豚肉	鶏肉	鳥卵	生乳
インドネシア	3	1	13	19	11
マレーシア	8	7	52	22	34
フィリピン	5	18	20	6	14
タイ	2	20	23	12	32
ベトナム	8	44	19	7	28

資料：生産量は各国統計、人口は国際通貨基金、それ以外はFAO「FAOSTAT」

注1：牛肉は水牛肉を含む。

注2：消費量は、「生産量+輸入量-輸出量」で算出。

注3：マレーシアの生産量は半島部のみ（サバ、サラワク州を含まず）。

注4：黄色部は各品目における2021年の1人当たりの年間消費量が最大の国を示す。

2 東南アジア諸国の畜産の動向

(1) 酪農・乳業

ASEAN諸国では、高温・多湿な気候条件が乳用牛の飼養にあまり適しておらず、良質な自給飼料の確保も困難なことから、酪農・乳業は欧米諸国に比べて盛んではなく、牛乳・乳製品は、伝統的に一般的な食材とはいえなかった。また、流通やインフラの関係から、消費される乳製品は、主に全粉乳などの粉乳類か、缶入りの加糖れん乳が中心であった。しかし、近年はコールドチェーンの発達や経済発展に伴い、特に都市部およびその周辺では飲用乳の需要も高まりつつある。また、経済的に恵まれない子供たちの栄養条件の改善のため、政府や大手企業による乳製品供給支援プロジェクトが実施されているところもある。

各国とも、脆弱な酪農生産基盤から牛乳・乳製品の自給にはほど遠い現状にあるが、2億7000万人の人口を有し、近年、経済発展を遂げているインドネシアを中心に、乳製品需要の伸びが期待されている。

一方で、ASEAN各国では、公的な統計に反映される生乳生産量が少ないことから、乳製品需給動向の正確な把握は困難となっている。

① 生乳生産動向

2021年の乳用牛飼養頭数および生乳生産量を見ると、多くの国で生乳生産量は前年を下回ったが、飼養頭数は前年を上回っている（図2、表4）。

5カ国の状況を見ると、インドネシアの乳用牛飼養頭数は58万2000頭（前年比2.5%増）、生乳生産量は94万6390トン（同0.1%減）となった。同国では、乳用牛の大部分はジャワ島のジャカルタなどの大消費地に近い冷涼な気候の山岳地域で飼養されている。近年は、熱帯に属する同国でも、厳しい環境下に対応し、高品質かつ生乳生産量が多い乳用牛の育種に取り組んでいる。同国政府は牛肉の国内自給率を90%にするという目標を掲げ、12年から生体牛および牛肉の輸入規制などを行った。しかし、結果として国内の牛肉需給のひっ迫から乳用牛のと畜頭数が増加し、乳用牛飼養頭数

は大幅に減少した。13年下期から、国内牛肉価格を基準に輸入の可否を判断する基準価格方式の導入などにより、輸入規制が緩和されたことで、14年以降は、乳用牛飼養頭数、生乳生産量ともにおおむね増加傾向にある。

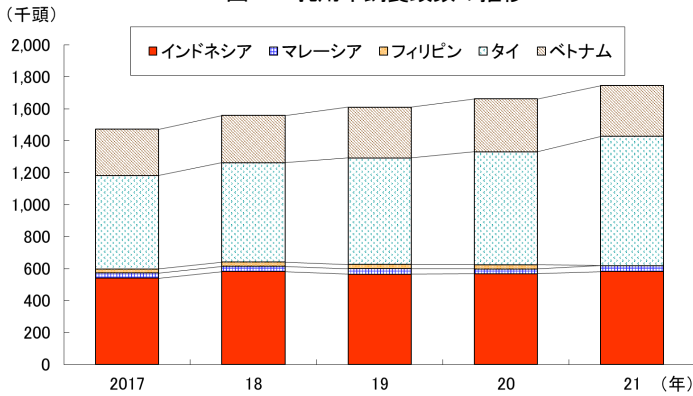
マレーシアの乳用牛飼養頭数は3万5978頭（同17.6%増）、生乳生産量は3万8700トン（同7.4%減）となった。飼養頭数が多い州は、シンガポールに国境を接するジョホール州、首都クアラルンプール近郊のスランゴール州、中央部にある半島最大のパハン州などである。歴史的に油ヤシや天然ゴムのプランテーションとしての土地利用が多く、反すう家畜のための飼料生産基盤は限定的とされてきた。しかし、近年は自給率を高めるために国内の生乳生産基盤が強化されてきた。21年に施行された国家酪農開発戦略計画（2021-2025）に基づき、生産能力および生産性の向上、適切なコスト管理などにより、2025年には生乳自給率100%を目指すとしている。

フィリピンの生乳生産量は2万6300トン（同1.5%減）となった。同国では水牛が乳用として飼養されており、生乳生産量の約5割が牛由来、残りの5割は水牛とヤギ由来とみられている。酪農環境の厳しさから国内生産に対する民間の資本投資があまり盛んに行われず、生乳生産量は伸び悩んでいる。

タイの乳用牛飼養頭数は81万518頭（同14.6%増）、生乳生産量は1328万トン（同1.1%減）となった。乳用牛飼養頭数は、経済発展による食の多様化や学校給食用など飲用乳需要の増加を反映し、09年以降、おおむね増加傾向で推移してきた。21年は、ランピースキン病の発生が乳牛の搾乳量に影響を与えているとみられる。

ベトナムの乳用牛飼養頭数は31万6849頭（同4.3%減）で、生乳生産量は106万1496トン（同1.1%増）となった。乳用牛の約4割は、主要消費地となるホーチミン市近郊で飼養されている。01年に政府が酪農振興計画を打ち出して以来、ビナミルク、THミルクなど大手乳業による大規模酪農場の開設が続いたことなどから、飼養頭数、生乳生産量ともにおおむね増加傾向にある。

図2 乳用牛飼養頭数の推移



資料：各国政府統計

注：2021年のフィリピンの数値は未公表。

表4 乳用牛飼養頭数と生乳生産動向（2021年）

(単位：千頭、千トン)

国名	飼養頭数	前年比 (増減率)	生乳生産量	前年比 (増減率)
インドネシア	582.0	2.5%	946	▲ 0.1%
マレーシア	36.0	17.6%	39	▲ 7.4%
フィリピン	-	-	26	▲ 1.5%
タイ	810.5	14.6%	1,328	▲ 1.1%
ベトナム	316.8	▲ 4.3%	1,061	1.1%

資料：各国政府統計

注1：マレーシアの飼養頭数は半島部のみ（サバ、サラワク州を含まず）。

注2：フィリピンの飼養頭数は未公表、生乳生産量は水牛乳およびヤギ乳を含む。

② 牛乳・乳製品の需給動向

ASEAN諸国では、牛乳・乳製品の生産量に対し、輸入量や消費量も多い状況にある（表5）。多くの国で乳製品の需要が伸びており、自給率向上のため、生産拡大に取り組んでいる。

2021年の牛乳・乳製品の1人当たり年間消費量を5カ国別に見ると、インドネシアは11.2キログラムとなった。ただし、調製粉乳と加糖れん乳の消費が多く、飲用乳の消費は大都市圏に限られ、絶対量は少ない。

マレーシアは34.5キログラムとなった。一般的には甘味嗜好を背景に、加糖れん乳が多く消費されており、牛乳はフレーバー付きの需要が高い。輸出量は5カ国の中で最も多いが、これはニュージーランドや豪州から輸入した粉乳を原料に国内で調製品に加工し、再輸出しているためである。

フィリピンは14.4キログラムとなった。国内で流通する牛乳・乳製品のほぼ全量が、ニュージーランド、米国、豪州などからの輸入乳製品および輸入品を原料とした加工品となっている。同国では生産量拡大に向けた政府主導の増産プログラムに取り組んでおり、中流階級

を中心に人口が増加している中、さらなる乳製品需要拡大の余地があるとみられている。

タイは31.7キログラムとなった。デンマーク政府の協力により設立されたタイ酪農振興機構などの酪農業協同組合や外資系企業による牛乳・乳製品の生産拡大が進む中で、学校給食用を中心とした需要などにより、消費量は増加傾向で推移している。同年の牛乳・乳製品輸出量は23万8000トンと高い水準にあるが、これは、豪州、ニュージーランドから輸入した脱脂粉乳などを原料に、国内で還元乳、はっ酵乳などに加工し、周辺国などを中心に輸出しているためである。

ベトナムは28.1キログラムとなった。従来、同国では牛乳や乳製品の消費量は少なかったが、経済成長と政府の酪農振興策を背景に、徐々に消費が伸びており、市場は拡大傾向にある。

表5 牛乳・乳製品の需給動向（2021年）

(単位：千トン、kg/人/年)

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	1人当たり消費量
インドネシア	946	2,144	3,039	52	11.2
マレーシア	39	1,532	1,122	449	34.5
フィリピン	26	1,643	1,588	81	14.4
タイ	1,328	1,125	2,215	238	31.7
ベトナム	1,061	1,858	2,769	151	28.1

資料：生産量は各国統計、それ以外はFAOの「FAOSTAT」

注：消費量は「生産量+輸入量-輸出量」で算出。1人当たり消費量は、消費量を当該年の人口で除して得られた数値。人口はIMFのデータを使用。

(2) 肉牛・牛肉産業

ASEAN諸国では、食習慣や経済発展の差が大きいことを背景に、牛肉の1人当たり年間消費量は、国ごとに開きがあるが、近年の消費量はおおむね横ばいで推移している。

牛肉消費が伸びない一因として、一部の品種で繁殖牛のと畜が制限され、老齢牛中心にと畜が行われていたことから、牛肉が硬い肉というイメージが定着していたことなどが挙げられる。

① 牛の生産動向

2021年の肉用牛などの飼養頭数を5カ国別に見ると、インドネシアは1797万7000頭（前年比2.8%増）となった（図3、表6）。同国政府は国産牛肉の需要に対応するため、肉用牛および水牛の増産を奨励しており、人工授精技術の普及などにより増頭傾向にあ

る。地域別では、首都ジャカルタのあるジャワ島が飼養頭数全体の約4割を占めている。また、豪州などから肥育もと牛を輸入して短期間肥育するフィードロットもあるが、経営体数は少ない。なお、乳用牛と同様に口蹄疫やランピースキン病の影響が懸念されている。

マレーシアは61万5104頭（同2.2%増）となった。プランテーションで放牧し、下草を食べさせるなど粗放的な一貫経営が多く見られるほか、フィードロットなどの集約的な経営を行っているところもある。同国では21年に施行された国家肉用牛開発戦略計画（2021-2025）に基づき、2025年には牛肉・水牛肉の生産量11万1000トン、同自給率50%を目指すとしている。

フィリピンは260万5000頭（同2.5%増）となった。豪州などから肥育もと牛を輸入する商業的なフィードロット経営も見られるが、飼養頭数20頭未満の小規模経営が大半を占めている。飼養頭数の多い水牛は、その多くが農作業の耕作や物資の移送のための役用として飼養されている。

タイは758万2460頭（同21.7%増）となった。政府の肉牛振興政策などにより増加傾向で推移している。

ベトナムは598万683頭（同1.1%増）となった。同国の家畜開発戦略では、21～30年の牛肉生産量の年間平均成長率を1%以上とすることを目標としている。なお、生体牛をタイ、ラオス、カンボジアなどの近隣諸国や豪州から輸入し、肥育を行う経営が一般的である。

表6 肉用牛・水牛飼養頭数と牛肉生産量（2021年）

	飼養頭数				牛肉生産量 (水牛を含む)	
	肉用牛	前年比 (増減率)	水牛	前年比 (増減率)	(単位:千頭、千トン)	前年比 (増減率)
インドネシア	17,977	2.8%	1,143	▲1.0%	507	7.4%
マレーシア	615	2.2%	49	9.0%	42	▲11.5%
フィリピン	2,605	2.5%	2,849	▲0.6%	365	4.6%
タイ	7,582	21.7%	1,521	21.1%	131	▲36.6%
ベトナム	5,981	1.1%	2,264	▲3.0%	585	3.3%

資料：各国政府統計

注：マレーシアの肉牛の飼養頭数は半島部のみ（サバ、サラワク州を含まず）。

② 牛肉の需給動向

2021年の牛肉生産量（水牛肉を含む）を5カ国別に見ると、インドネシアは50万6740トン（前年比7.4%増）、マレーシアでは4万2437トン（同11.5%減）、フィリピンは36万5450トン（同4.6%増）、タイは13万1100トン（同36.6%減）、ベトナムは58万4961トン（同3.3%増）となった（図4、表7）。

21年の牛肉（水牛肉を含む）の1人当たり年間消費量を5カ国別に見ると、インドネシアは3.1キログラムとなった。COVID-19により輸入環境が厳しい中、以前から国内生産の拡大に取り組んでいるが、人口増加による需要増に追いついていない状況となっている。また同国では、牛肉の消費習慣は民族・宗教によって異なっており、消費地域は人口の6割が居住し、所得水準が比較的高い首都ジャカルタがあるジャワ島に集中している。

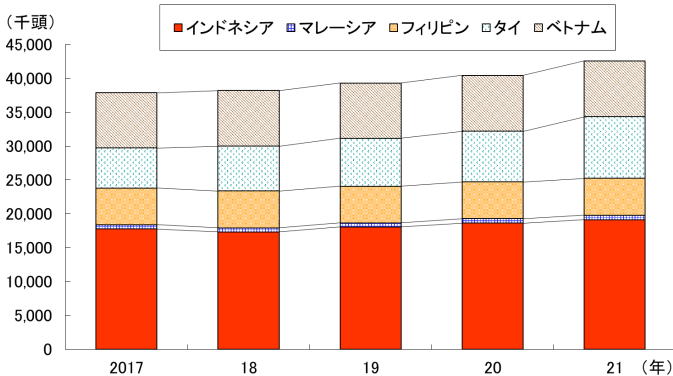
マレーシアは7.6キログラムとなった。牛肉自給率は2割程度で、輸入牛肉の割合が大きくなっており、主な輸入先はインド、豪州である。

フィリピンは5.3キログラムとなった。牛肉自給率は7割程度であり、主な輸入先はブラジル、インド、豪州である。このうち、インドから輸入される安価な水牛肉は、国内法の規制によりコンビーフなどの加工用に限定されている。

タイは2.3キログラムとなった。消費量に対して一定の牛肉生産量があることで、輸入量は5万5747トンと5カ国中で最も少ない。21年はランピースキン病の影響を受け、生産量は大きく減少したとみられる。

ベトナムは8.4キログラムとなった。主な輸入先はインド、豪州、カナダである。経済発展が著しく、アフ

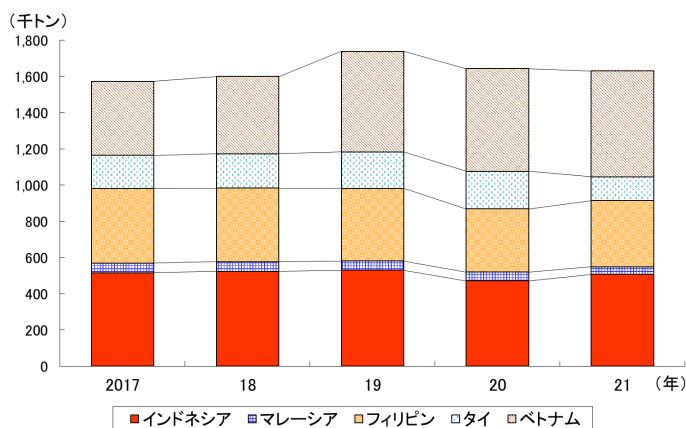
図3 肉用牛・水牛飼養頭数の推移



資料：各国政府統計

リカ豚熱（ASF）の流行もあった中で牛肉需要は増加しているとみられている。

図4 牛肉・水牛肉生産量の推移



資料：各国政府統計

表7 牛肉の需給動向（2021年）

（単位：千トン、kg/人/年）

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	1人当たり消費量
インドネシア	507	330	837	0	3.1
マレーシア	42	215	246	11	7.6
フィリピン	365	219	583	2	5.3
タイ	131	56	163	24	2.3
ベトナム	585	245	823	7	8.4

資料：生産量は各国統計、それ以外はFAOの「FAOSTAT」

注1：水牛肉を含む。

注2：消費量は「生産量+輸入量-輸出量」で算出。1人当たり年間消費量は、消費量を当該年の人口で除して得られた数値。人口はIMFのデータを使用。

注3：マレーシアは半島部のみ（サバ、サラワク州含まず）。

（3）養豚・豚肉産業

ASEAN諸国は、インドネシア、マレーシアをはじめ宗教上の理由から豚肉を食さないイスラム教徒の人口も多く、国によって豚肉の消費量には大きな差があり、豚肉の政策上の位置付けもさまざまである。他方、イスラム教徒が多数を占める国であっても、中国系住民などからの豚肉需要があるため、飼養規模、地域など限定的ではあるものの、養豚業は存在している。

① 豚の生産動向

ASEAN諸国では、口蹄疫や豚繁殖・呼吸障害症候群（PRRS）などの疾病に加え、ASFが発生しているため、衛生対策が課題となっている。

2021年の豚飼養頭数を5カ国別に見ると、イスラム教徒が比較的多く、1人当たりの年間消費量が少ない

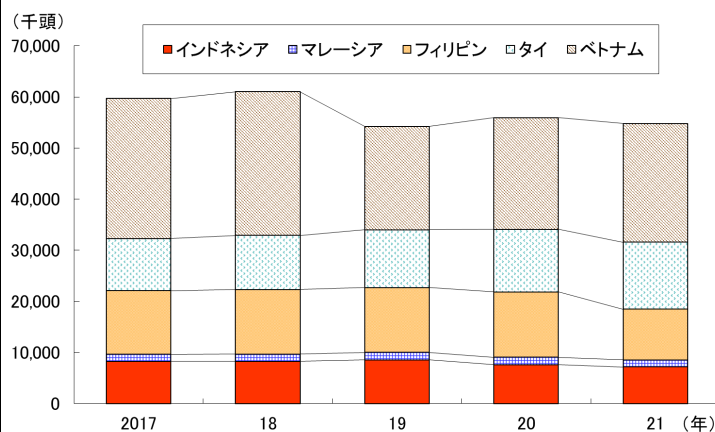
インドネシアおよびマレーシアでは、それぞれ717万8000頭（前年比5.8%減）、137万9694頭（同4.9%減）となった（図5、表8）。両国の飼養頭数の差は、非イスラム教徒がインドネシアでは約3600万人（人口2億7225万人）であるのに対し、マレーシアでは約1200万人（人口3258万人）と、基本的には非イスラム人口の差によるものであると考えられる。

フィリピンは、宗教的な制約が比較的小さいことから5カ国の中でベトナムに次いで飼養頭数が多かったが、21年は994万3000頭（同22.3%減）と大幅に減少し、タイの飼養頭数を下回ったことで5カ国中3番目となった。ASFが継続的に発生している同国では、生産者が伝染病の再発を恐れていることで生産規模の回復が遅れている。

タイは、近年、価格変動や疾病などの影響により増減を繰り返しているが、17年以降は増加傾向で推移し、21年は1310万3887頭（同7.2%増）となった。しかし、21年11月にASFが発生したことにより、同国の生産基盤は一定の影響を受けた。

ベトナムは、国内の豚肉需要の拡大を受けて2000～05年にかけて飼養頭数は増加し、その後は、疾病の発生や飼料価格の高騰、出荷価格の低迷などから、おおむね横ばいで推移した。直近では、ASFの流行により同国の養豚業は大きな影響を受け、19年の飼養頭数は大きく落ち込んだが、伝染病対策に取り組んでいることで、21年は2320万2614頭（同6.2%増）と2年連続で回復している。

図5 豚飼養頭数の推移



資料：各国政府統計

表8 豚飼養頭数と豚肉生産量（2021年）

(単位:千頭、千トン)

国名	飼養頭数		生産量	
	前年比 (増減率)	前年比 (増減率)	前年比 (増減率)	前年比 (増減率)
インドネシア	7,178	▲ 5.8%	261	▲ 7.3%
マレーシア	1,380	▲ 4.9%	197	▲ 10.5%
フィリピン	9,943	▲ 22.3%	1,696	▲ 20.8%
タイ	13,104	7.2%	1,450	▲ 2.7%
ベトナム	23,203	6.2%	4,236	6.3%

資料：各国政府統計

注：マレーシアの飼養頭数は半島部のみ（サバ、サラワク州含まず）。

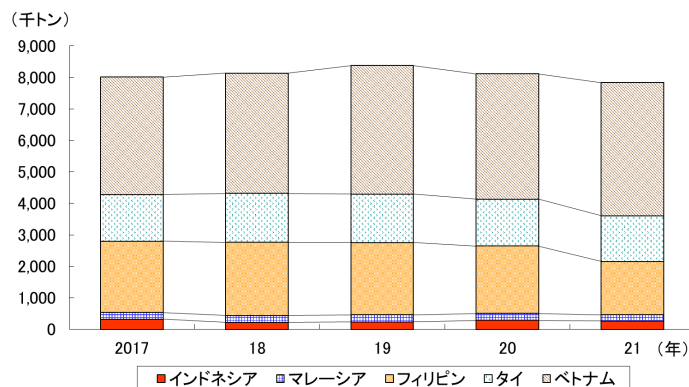
② 豚肉の需給動向

2021年の5カ国の豚肉生産量を見ると、インドネシアは26万850トン（前年比7.3%減）、マレーシアは19万7372トン（同10.5%減）、フィリピンは169万6150トン（同20.8%減）、タイは145万トン（同2.7%減）、ベトナムは423万6036トン（同6.3%増）となった（図6、表9）。19年以降、ASFの影響を受けているフィリピンが大きく生産量を落としている一方で、ベトナムは生産量を回復している。

ASEAN諸国の豚肉消費は、宗教の影響を強く受けている。21年の豚肉の1人当たり年間消費量は、イスラム教徒が人口の大半を占めるインドネシアで1.0キログラムであったのに対し、食肉に関する宗教的制約が比較的少ないベトナムでは43.6キログラム、フィリピンでは18.3キログラム、タイでは20.5キログラムとなっており、国による差が大きい。

一方、マレーシアでは、イスラム教を国教と位置付けているものの、伝統的に豚肉を好む中国系住民（非イスラム教徒）などが人口の4割程度を占めていることから、国全体では6.5キログラムとなっている（上述の非イスラム人口で除した1人当たり年間消費量では、インドネシアは7.3キログラム、マレーシアは18.2キログラムとなる）。

図6 豚肉生産量の推移



資料：各国政府統計

表9 豚肉の需給動向（2021年）

(単位:千トン、kg/人/年)

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	1人当たり消費量
インドネシア	261	2	263	0	1.0
マレーシア	197	19	213	3	6.5
フィリピン	1,696	323	2,017	2	18.3
タイ	1,450	0	1,434	17	20.5
ベトナム	4,236	64	4,294	6	43.6

資料：生産量は各国統計、それ以外はFAOの「FAOSTAT」

注1：消費量は「生産量+輸入量-輸出量」で算出。1人当たり年間消費量は、消費量を当該年の人口で除して得られた数値。人口はIMFのデータを使用。

注2：マレーシアは半島部のみ（サバ、サラワク州を含まず）。

(4) 養鶏・鶏肉・鶏卵産業

① 鶏の生産動向

ASEAN諸国では、肉用鶏や採卵鶏の飼養が盛んであり、在来鶏やブロイラーのほか、アヒルなどの家きんも飼養されている。

2021年の状況を5カ国別に見ると、インドネシアの肉用鶏出荷羽数は31億9560万羽（前年比0.9%減）であり、このうち約9割がブロイラーとなる。ブロイラーの生産は、主に西ジャワ州、東ジャワ州、中部ジャワ州で行われ、当該3州で全国の生産羽数の半数以上を占めている。ブロイラーの出荷羽数が減少している一方で、地鶏の出荷羽数は増加している。同年の鶏肉生産量は345万5500トン（同1.0%減）となった（図7、表10）。また、採卵鶏および地鶏生産は、ブロイラーと同様、上記3州が中心となっており、採卵鶏飼養羽数は3億8613万羽（同11.9%増）、鶏卵生産量は515万6000トン（同0.3%増）となった。

マレーシアの肉用鶏飼養羽数は1億4315万羽（同5.8%減）、鶏肉生産量は165万3000トン（同2.9%

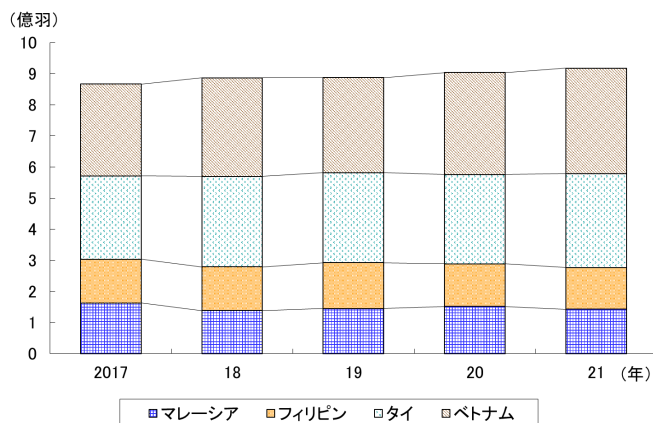
減)となった。また、採卵鶏飼養羽数は5954万羽(同3%減)、鶏卵生産量は83万9700トン(同5.6%増)となった。

フィリピンの肉用鶏飼養羽数は1億3393万羽(同2.3%減)、鶏肉生産量は174万4800トン(同3.6%減)となった。また、採卵鶏飼養羽数は4288万8000羽(同4.1%増)、鶏卵生産量は66万1390トン(同9.2%増)となった。ASFの発生を受け、養豚業から採卵鶏業にシフトする生産者もいたとされている。

タイでは、04年の鳥インフルエンザの発生以降、日本やEU向けなどの生鮮鶏肉の輸出が停止していたが、EU向けは12年7月、日本向けは13年12月、韓国向けは16年11月にそれぞれ解禁された。肉用鶏飼養羽数は3億194万羽(同5.1%増)、鶏肉生産量は280万1473トン(同1.8%減)となった。また、採卵鶏飼養羽数は5829万1524羽(同1.6%増)、鶏卵生産量は88万8816トン(同3.3%増)となった。

ベトナムの肉用鶏飼養羽数は3億3898万羽(同3.5%増)となり、鶏肉生産量は159万1090トン(同12.1%増)となった。鶏肉供給能力は前年比で増加する中、COVID-19の影響で食鳥処理場を中心に物流に影響が出たため、地域によっては生体価格が下落したところもあるとされる。また、鶏卵生産量は67万3894トン(同7.5%増)となった。

図7 肉用鶏飼養羽数の推移



資料：各国政府統計

注：インドネシアの肉用鶏は、生産羽数のため割愛。

表10 鶏の飼養羽数と鶏肉・鶏卵の生産量(2021年)

(単位: 千羽、千トン)

国名	飼養羽数				生産量			
	肉用鶏	前年比 (増減率)	採卵鶏	前年比 (増減率)	鶏肉	前年比 (増減率)	鶏卵	前年比 (増減率)
インドネシア	3,195,600	▲0.9%	386,126	11.9%	3,456	▲1.0%	5,156	0.3%
マレーシア	143,151	▲5.8%	59,539	▲3.0%	1,653	▲2.9%	840	5.6%
フィリピン	133,932	▲2.3%	42,888	4.1%	1,745	▲3.6%	661	9.2%
タイ	301,937	5.1%	58,292	1.6%	2,801	▲1.8%	889	3.3%
ベトナム	338,981	3.5%	85,585	5.0%	1,591	12.1%	674	7.5%

資料：各国政府統計

注1：タイとベトナムの鶏卵は1個58グラムで換算。

注2：インドネシアの肉用鶏は生産羽数の数値。

注3：マレーシアは半島部のみ(サバ、サラワク州含まず)。

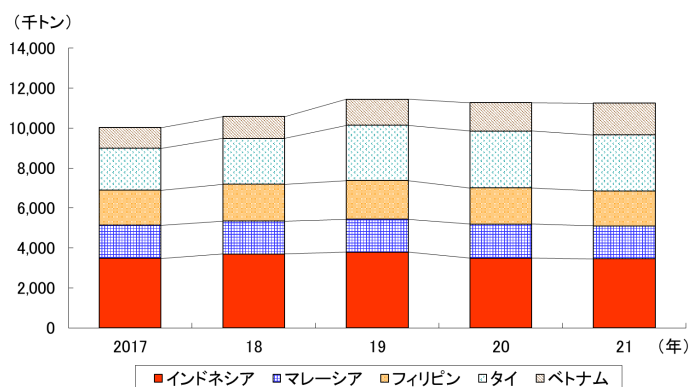
② 鶏肉の需給動向

鶏肉は宗教上の制約が少ないことから、ASEAN諸国では身近で重要な動物性たんぱく質となっており、経済成長に伴う消費の伸びを受けて生産量は増加傾向で推移していたが、2021年はCOVID-19の影響により停滞している(図8、表11)。

21年の鶏肉の1人当たりの年間消費量を見ると、マレーシアは51.8キログラムとなった。同国は、イスラム教を信仰するマレー系などが人口の過半を占めていることから、宗教的な制約が少ない鶏肉が多く消費されている。

タイは22.6キログラムとなった。同国は鶏肉の輸出に注力しているが、食鳥処理場の労働者間でCOVID-19が広まったことに加え、外国人労働者を中心に人手不足となったことから、操業に影響が出たため、生産量は減少した。

図8 鶏肉生産量の推移



資料：各国政府統計

表 1 1 鶏肉の需給動向（2021年）

（単位：千トン、kg/人/年）

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	1人当たり消費量
インドネシア	3,456	0	3,455	0	12.7
マレーシア	1,653	97	1,687	63	51.8
フィリピン	1,745	430	2,173	2	19.7
タイ	2,801	2	1,584	1,219	22.6
ベトナム	1,591	241	1,826	6	18.5

資料：生産量は各国統計、それ以外はFAOの「FAOSTAT」

注1：消費量は「生産量+輸入量-輸出量」で算出。1人当たり年間消費量は、消費量を当該年の人口で除して得られた数値。人口はIMFのデータを使用。

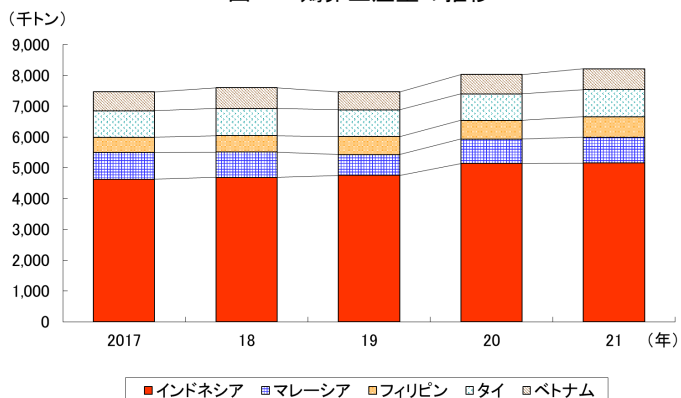
注2：マレーシアは半島部のみ（サバ、サラワク州を含まず）。鶏卵の需給動向。

③ 鶏卵の需給動向

東南アジア諸国では、鶏卵価格の変動に伴い生産調整を行っているが、需給安定機能が十分に働かないことから、供給過剰とひっ迫を繰り返すという問題を抱えている。

鶏卵の1人当たり年間消費量は、マレーシア、インドネシアの順に多く、2021年はそれぞれ22.3キログラム、18.9キログラムとなった。一方で、最も消費量の少ないフィリピンでは同6キログラムと、国によって大きな開きがある（図9、表12）。

図9 鶏卵生産量の推移



資料：各国政府統計

表 1 2 鶏卵の需給動向（2021年）

（千トン、kg/人/年）

国名	生産量	輸入量	消費量	輸出量	1人当たり消費量
インドネシア	5,156	-	5,156	0	18.9
マレーシア	840	0	726	114	22.3
フィリピン	661	0	662	0	6.0
タイ	889	0	872	17	12.5
ベトナム	674	0	672	2	6.8

資料：生産量は各国統計、それ以外はFAOの「FAOSTAT」

注1：タイとベトナムの鶏卵は1個58グラムで換算。

注2：消費量は「生産量+輸入量-輸出量」で算出。1人当たり年間消費量は、消費量を当該年の人口で除して得られた数値。人口はIMFのデータを使用。

注3：マレーシアは半島部のみ（サバ、サラワク州を含まず）。